

岡崎市議会議長 様

支出番号	1
------	---

会派名 自民清風会
代表者名 磯部 亮次

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 報 告 書

令和7年3月31日提出

活動年月日	令和7年2月4日（火）～6日（木）		
氏名	加藤義幸 鈴木静男 杉浦久直 荻野秀範 金山直樹 蜂須賀一郎		
用務先 及び 内 容	1 2月4日	用務先	佐賀県 鳥栖市
		内 容	プロスポーツチームのホームタウン支援事業について
	2 2月5日	用務先	佐賀県 鹿島市
		内 容	鹿島酒蔵ツーリズムについて
	3 2月6日	用務先	広島県 竹原市
		内 容	官民連携による竹原観光まちづくりについて
	4 月 日	用務先	
		内 容	
備 考			

政策調査報告書

報告者: 蜂須賀一郎

会派名・視察者	自民清風会: 加藤義幸 荻野秀範 鈴木静男 杉浦久直 金山直樹 蜂須賀一郎		
視察日時	令和7年2月4日(火)	視察地	佐賀県鳥栖市
視察先・概要	視察先: 駅前不動産スタジアム(佐賀県鳥栖市京町 812) 佐賀県鳥栖市: 人口 74,507 人 世帯数 33,962 世帯 面積 71.72 km ²		
選定理由	鳥栖市では、ホームタウンとするサガン鳥栖や久光スプリングスの プロスポーツをはじめ、日常的にスポーツ観戦や支援する機会の充実に取り組まれている。プロスポーツチームの選手が子どもたちに夢や希望を与える影響は非常に大きい。また、そのことが市の活性化に繋がり、全国でも人口が増えている珍しい都市であるため。		
岡崎市の現状と課題	ジェイテクト STINGS が現在岡崎市をホームタウンとして活躍を続けているが、こうしたプロチームに対し、適切なサポート体制の確立、また市民の皆様への浸透をどう高めてゆくのか、さらにジュニアチームの育成が課題。		

1 調査項目

プロスポーツチームのホームタウン支援事業について

2 質問事項

- ・ホームタウン支援事業の概要について
- ・同事業に取り組んだ経緯、背景について
- ・特に力を入れていた取り組みについて
- ・同事業の効果、実績について
- ・同プロジェクトに対する市民の声について
- ・現在の課題、今後の展開について

3 視察目的

鳥栖市の人口は7万4,507名と、岡崎市の5分の1の人口であるが、プロスポーツチームを2チーム抱える日本においても珍しいスポーツ都市である。日常的にスポーツ観戦や支援する機会の充実に取り組まれ、市民の満足度も高い。このスポーツを通じた取組から鳥栖市への移住が多く、鳥栖市の人口は現在も増え続け、サガン鳥栖の前身であるPJMフューチャーズの誘致(1991年)から、現在までの約34年間で約17,000人増加している。このスポーツを通じた街づくり、活性化を引き出した施策についてお伺いするため。

3 鳥栖市のホームタウン支援本部について

サガン鳥栖及びSAGA久光スプリングスと連携を図り、スポーツ文化の振興及び両クラブへのホームタウンとしての支援を目的に「ホームタウン支援本部」を設置している。

【設立時期】 平成16年2月(令和3年4月に組織見直し)

【構 成 員】 本部長＝副市長、副本部長＝所管部長、本部員＝全部課長

【取組内容】 ① 両クラブに対するチケット(年間パス)やファンクラブの斡旋
② 集客に関する支援
③ 地域貢献活動への支援

【開催時期】 7月(スプリングス)、2月(サガン鳥栖)

【議 題】 前シーズンの活動報告、新シーズンの事業計画について



【サガン鳥栖のホームスタジアム】



【スタジアム内選手控室にて】

4 サガン鳥栖ホームスタジアム『駅前不動産スタジアム』について

(1) 立地

① 鳥栖駅より徒歩3分

※駅出口は1箇所のみ

(歴史的景観保護のため)

(2) 収容人数

25,000 人(J1の要件を満たす)



【鳥栖駅横の陸橋から】

※鳥栖市から出土した弥生時代の細形銅剣をモチーフとして建設されている。

5 鳥栖市が同事業に取り組んだ経緯、背景について

(1) サガン鳥栖は 1997(H9)年に発足以来「市民クラブ」として活動してきたが 2005(H17)年に経営難のため、新たな運営会社に経営権が譲渡された。

これを機に、前身のホームゲーム集客支援本部が設置され、サガン鳥栖への側面的支援の強化が開始された。

(2) 鳥栖市をホームタウンとするサガン鳥栖、SAGA久光スプリングスを応援することで市民に一体感が生まれ、さらにはチームの勝利や選手の活躍によりホームタウンの知名度が上がり、市民が地元に対して誇りを持てることにつながっている。

(3) 令和 5 年度(2023-24 シーズン)、久光スプリングスが神戸市から鳥栖市に拠点を移したことで、人口約7万人規模の都市としては全国的に見ても珍しい2つのプロスポーツチームのホームタウンとなった。

(4) 現在、2つのプロスポーツチームとの連携により、子どもたちをはじめとする市民との交流やスポーツによる市民間の交流を図る「地域交流推進事業」に取り組まれている。



【杉浦久直市議よりご挨拶】



【会議の様子】

6 同事業の効果、実績について(令和5年度実績値)

(1) 栖市の冠試合

- ・ サガン鳥栖 令和 6 年 3 月 2 日(土)札幌戦 来場者:7,346 人

市民無料招待による応援機運醸成のほか、来場者への鳥栖銘菓配布により本市の魅力発信につなげている。

- ・ SAGA久光スプリングス 10 月 22 日(日)トヨタ車体戦 来場者 7,355 人
チームと連携し開幕戦両日の無料招待事業を行い、市民の応援機運醸成につなげている。

(2) スプリングスホームゲームの観戦促進(SAGA アリーナ)

- ・ 2日間計12台のバスを延べ408人が利用し、市民の観戦促進につなげている。

(3) 相互エール事業

- ・ サガン鳥栖がサポーターとともにスプリングスのホームゲームを応援
- ・ スプリングスがファンとともにサガン鳥栖ホームゲームを応援
ファン、サポーターとともに互いのチームを応援し、相互による応援機運醸成につなげている。

(4)市内中学校との交流事業(令和5年度はサガン鳥栖のみ実施)

- ・ 市内中学校2校の行事に選手が参加し、生徒との積極的な交流が図られている。

(5)鳥栖西中学校の文化発表会(合唱コンクール)において、選手がピアノの弾き語りを披露し、身近に感じていただく機会の創出している。

(6)練習拠点開放奨励金(令和5年7月6日～令和6年3月末)の実施。

- ・ 鳥栖市民体育館と同等規模の施設を市民に開放し、スポーツの新たな受け皿としている。
- ・ 開放日数:207日 利用人数:延べ20,774人
- ・ 主な種目:バレーボール、バドミントン、バスケットボール、卓球

7 同プロジェクトに対する市民の声・感想について

(1)市民デー招待への興味の高さ(応募数) 申込期間は2/17～18の2日間

- ・ サガン鳥栖 令和6年3月2日(土)札幌戦 来場者:7,346人
- ・ 小学生親子ペア150組300名を無料招待(応募数:359組)

(2)相互エール事業参加者のアンケート結果

① サガン鳥栖サポーター → スプリングスホームゲームを観戦

- ・ サッカー以外のスポーツを生で見る迫力を味わえた
- ・ 試合後のコート見学、良席での観戦、新鍋理沙さん(スプリングスOGで元日本代表)にも会えて満足できた
- ・ 個人で申し込んでの観戦はハードルが高かったなので、このような企画があるとスプリングスを応援するきっかけになるのでありがたい

② スプリングスファン → サガン鳥栖ホームゲーム

- ・ ピッチ等の普段は入れない場所を見学でき、貴重な体験ができた
- ・ バレーとは違ったスタジアムの応援の雰囲気を楽しめた
- ・ 石井優希さん(スプリングスOGで元日本代表)、高橋義希さん(サガン鳥栖OBで鳥栖市特命応援団長)ともふれあえ、両チームがより好きになった

8 現在の課題、今後の展開について

(1)サガン鳥栖が練習、ホームゲームを鳥栖市で行うのに対し、SAGA久光スプリングスは、練習は鳥栖市、ホームゲームは佐賀市で行うことになっている。しかし、鳥栖市を拠点に活動する点においては相違がないため、両クラブと連携した取組や予算規模ともに同等とし、さらに、三者(市、サガン鳥栖、SAGA久光スプリングス)による連携へと発展させることで、ホームタウンとしての特性を最大限発揮していくことを目指している。

(2)SAGA久光スプリングスが鳥栖市に拠点を移して日が浅いため、ホームタウン活動にまで十分な人員や時間をかけられていない状況であるが、本市を拠点に活動するサガン鳥栖、SAGA久光スプリングスと連携した取組や予算規模については同等を基本としている。

特に、小さな自治体である良さを活かして、市民がチームや選手をより身近に感じられるような事業に力を入れていきたいと考えてみえる。



【サガン鳥栖 スタジアム内】



【スタジアム実況席(スタジアム内)】



【スタジアム実況席(スタジアム内)②】



【選手通路】

6 視察を通しての所感

鳥栖市(プロチーム、市民、行政)が一丸となって取り組まれた結果、約 34 年の時を経て、サッカーJ1クラブチーム(現在は J2)に迄成長している。しかし実際には、チームの解散や経営委譲等に陥りながら、これまで紆余曲折を何度も経て今に至る。プロバレーボールチームの SAGA 久光スプリングスは、1948 年より久光製薬鳥栖工場にて創部され、77 年もの歴史を刻んでいる。このことから、プロスポーツチームの育成には時間と並々ならぬ努力が必要ということがよく理解できた。

【加藤】

佐賀市には、有名なプロスポーツチームとしてサッカーのサガン鳥栖とバレーボールの SAGA 久光スプリングスがあり、両チームに対して平成16年に設立したホームタウン支援本部を中心に、チケットやファンクラブの斡旋、集客支援、地域貢献活動の支援をしており、クラブから市民に対しては、スポーツ教室、交流会等のファンサービスを行っている。

令和6年度は、両チームにたいして委託事業、拠点開放奨励金、地域交流推進事業として、合計 5676.5 万円を予算化し、チームの強化、市民交流による地域の活性化に寄与している。

本市に於いては、2つのクラブチームとの交流をしているが、まだまだマイナーチームの為、メジャーチームになれるような後押しも必要と考えられる。

【鈴木】

佐賀県鳥栖市「プロスポーツチームのホームタウン支援事業について」

近年ではプロ野球・サッカー以外にもラグビー・バスケット・バレーボール等今まで実業団スポーツであったもののプロ化が進んでいる。そこで今までは会社単位での活動であったが、プロ化により地域企業やファンそしてチーム拠点の自治体が連携共同しての応援による森上がりと言った地域活性化が進んでいる。

鳥栖市においては、サッカーのサガン鳥栖、バレーの SAGA 久光スプリングスの 2 チームがホームタウンとして拠点を置いている。その事により副市長を本部長に据えたホームタウン支援本部を立ち上げて、市職員全体で様々な支援を市民と共に取り組んでいて市民に一体感が生まれていると評価されている。

近年においては、豪雨や地震などの大きな災害が発生し地域の連携が必要となっているからこそ、平時においてのスポーツ応援による市民の一体感の創造はとても有効な施策となると感じた。

本市においても、三菱レッドダイヤモンドやマスヤス岡崎やジェイテクトSTINGSなどのチームと今まで以上に市民と親しく深い活動を通じることが可能となる支援事業の展開が必要と感じた。

【荻野】

鳥栖市の総合計画に「日常的にスポーツを観戦したり、支援したりする機会の充実に取り組むとされ、二つのプロスポーツチームを支援するために、ホームタウン支援事業として、副市長を本部長としてホームタウン支援本部を設置し推進している。各種推進事業の中で特に注視したいのは市内の児童生徒との交流事業であり、国際レベルの選手と交流し肌で感じることは重要であり、児童生徒にとっては貴重なものであると思う。

本市も国内ハイレベルなスポーツチームがあり、機会の充実を図る必要があると感じた。

【杉浦】

鳥栖市はサッカーとバレーボールの二つのプロスポーツチームのホームタウンとなっているが、そのことにより、市の名前を売るといふ、シティプロモーションの効果は非常に大きいものである。特に、サッカーのサガン鳥栖のチーム名によって、初めて市の名前が意識され、佐賀県にあることを認識したケースも全国的には多かったのではないだろうか。また、道中では新幹線の新鳥栖駅で乗り換えを行ったが、そのコンコースなどで、チームのプロモーションがされていることも、シビックプライドの醸成にもつながることと考える。

本市では、プロチームとしてはバレーボールのジェイテクト STINGS 愛知と、バスケットボールのシーホース三河が岡崎市をホームタウンとしているが、「岡崎市」の印象が薄いようにも感じられる。その面では、プロチームではないが、サッカーのマルヤス岡崎や、社会人野球の三菱自動車岡崎の方が、より岡崎を前面に売り出せていると感じられる。鳥栖市においては、市内の駅前の一等地にスタジアムが

あるが、そこにスタジアムを持ってきた決断の先見の明に感心するとともに、時間をかけながら市民にもホームチームを根付かせていったことを感じる事ができた。本市もこれからの各ホームチームの活躍に期待するとともに、時間をかけて市民に自分たちのチームだと思ってもらえるような取り組みの支援が必要だと感じた。

【金山】

市民クラブとして活動してきたスポーツにおいて、市民も盛り上げる機運によりサッカーチームを中心にホームタウン支援本部を設立し、現在では SAGA 久光スプリングスとも連携を図り、子どもをはじめ市民との交流を図る機会を積極的に創出している。

岡崎市でもプロリーグは、J-TECK スティングスがあり、また三菱自動車硬式野球部や FC マルヤスなど岡崎に根ざしたチームがあり、市民も一緒になり盛り上げる機運醸成が重要であると強く感じました。選手とのふれあう機会を作るなど、市民との接点を作り、岡崎市のイベントとの連動した企画も視野にいった提案に繋がっていきたいと考え、進めていきたい。

政策調査報告書

報告者: 蜂須賀一郎

会派名・視察者	自民清風会: 加藤義幸 荻野秀範 鈴木静男 杉浦久直 金山直樹 蜂須賀一郎		
視察日時	令和7年2月5日(水)	視察地	佐賀県鹿島市
視察先・概要	視察先: 鹿島市役所(佐賀県鹿島市大字納富分 2643 番地 1) 佐賀県鳥栖市: 人口 27,915 人 世帯数 10,029 世帯 面積 112.12 km ² ※福岡から JR 特急で約 60 分の位置関係		
選定理由	重要伝統的建造物群保存地区として鹿島市には「肥前浜宿」という宿場街があり、その周りは江戸時代から酒づくりの町(酒蔵の町)として繁栄してきた。しかし平成初期になるとこれまで主力であった酒造業は衰退し、老朽化する町の立て直しが鹿島市としての大きな課題となっていた。その解決を「鹿島酒蔵ツーリズム」を通し、鹿島市を再び活気づかせることに成功されている。その方策について知るため。		
岡崎市の現状と課題	岡崎における八丁味噌という全国的にも知られる特産品がある。また、岡崎市は徳川家康生誕の地であり、観光資源は他市と比較しても十二分に備えている。その観光資源の活用方法が課題である。		

1 調査項目

鹿島酒蔵ツーリズムについて

2 質問事項

- ・事業の概要について
- ・事業の経緯、背景について
- ・事業に取り組む際に配慮した点について
- ・事業の効果、実績について
- ・利用者の声(評価・要望)について
- ・現在の課題、今後の展開について



【鹿島市役所にて】



【鹿島酒蔵ツーリズムについて伺う】

3 視察目的(事業概要)

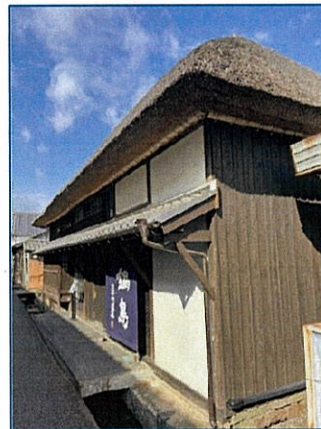
鹿島市の人口は2万 7,915 名と、岡崎市の約 14 分の1の人口である。江戸時代より酒蔵(日本酒)の街として繁栄してきたが、平成初期には鹿島市を支えてきたこの酒造業が、施設の老朽化と担い手不足により衰退の一途を辿る。この状態を立て直すため、鹿島市全体で酒蔵の支援と、伝統的な建物(街並み)の魅力の再認識、PR 活動が本格化した。転機は平成 23 年 9 月に開催された IWC(インターナショナルワインチャレンジ)において、鹿島市の富久千代酒造の大吟醸「鍋島」が、日本酒部門最高賞(世界一:チャンピオン・サケ)を受賞したことである。このことが契機で、全蔵において「ツーリズム」に取組めないかと、今回の視察目的である「鹿島酒蔵ツーリズム」が始まった。ツーリズムとはワインの分野において、ワイナリーを巡るという文化が世界的には確立されており、日本の鹿島市においても再現できないかという狙いがあった。今ではこの「鹿島酒蔵ツーリズム」に年間約 10 万人(コロナ前)の観光客が訪れており、立て直しに成功されるまでの施策についてお伺いするため。



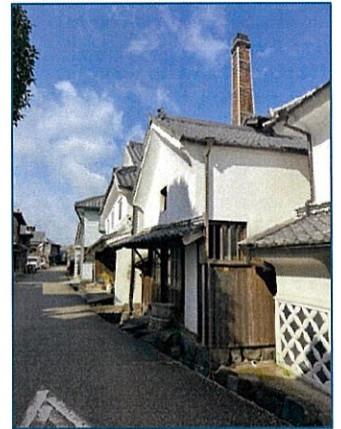
【肥前浜宿駅】



【天皇陛下が来訪】



【伝統的な茅葺家屋】



【酒蔵】

4 事業の経緯・背景・配慮事項

【設立時期】 平成 13 年 肥前浜宿水とまちなみの会発足(継場建物の寄贈)

平成 14 年 第1回花と酒祭りの開催

マスタープランの策定

平成 17 年 「肥前浜宿」の商標登録、NPO 法人化

平成 23 年 9 月 酒ツーリズム推進協議会設立

平成 23 年 11 月 鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会設立を公式表明

【コーディネート】 酒サマライコーディネートとして外務省地域力創造アドバイザーを設置

【コンセプト】 「鹿島の酒蔵を巡り、蔵人とふれあい彼のつくる酒を味わう。

その酒が産まれた土地を散策しながら食や文化、歴史を全身で楽しむ。鹿島ツーリズムはそんな旅のご提案。」

【開催時期】 平成 24 年 3 月 23、24 日 第1回鹿島酒蔵ツーリズムの開催

【成功理由】 ①肥前浜宿(重要伝統的建造物群保存地区)に酒蔵が密集。

②既存の花と酒祭りの実績

③行政の支援(人脈)と仲間意識・共通理解

5 事業の効果、実績

平成 28 年 2 月 第 6 回地域再生大賞受賞

平成 28 年 4 月 手づくり郷土賞国土交通大臣認定証受賞

平成 28 年 6 月 美しい景観大賞受賞

平成 28 年10月 重伝建選定10周年記念事業開催

平成29年 3 月 日本ユネスコ協会連盟 未来遺産 2016 登録

平成 31 年 4 月 新たなまちの動きとして「ゲストハウス(まる)」OPEN

令和 2 年 3 月 ふるさとづくり大賞総理大臣賞受賞

令和 3 年 1 月 肥前浜駅内に「HAMABAR」OPEN

茅葺町家の復活(御宿:富久千代 OPEN)

令和 5 年 11 月 第 16 回産業観光まちづくり大賞 観光庁長官賞受賞

※これらの受賞が決まる度、マスメディアによる取材に繋がった。

5 利用者の声(評価・要望)について

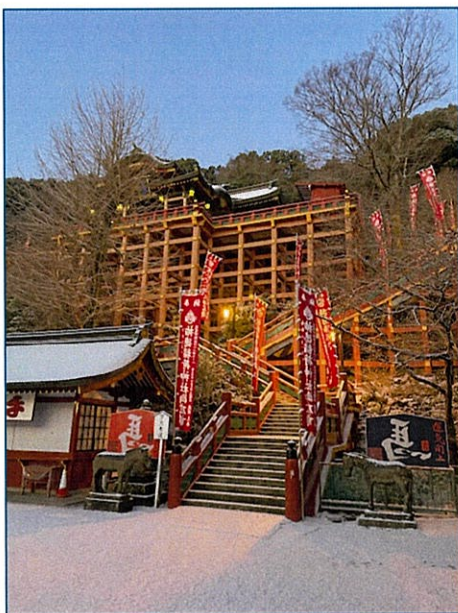
鹿島市を訪れる観光客数は年々増えている。観光資源として日本三大稲荷の「祐徳稲荷神社」、潟上の運動会「鹿島ガタリンピック」、「鹿島酒蔵ツーリズム」の3つが観光資源としての大きな柱となり成功されているが、利用者の声というよりも運営側として今後の展開をどうするのが課題となっている。

6 現在の課題と今後の展望

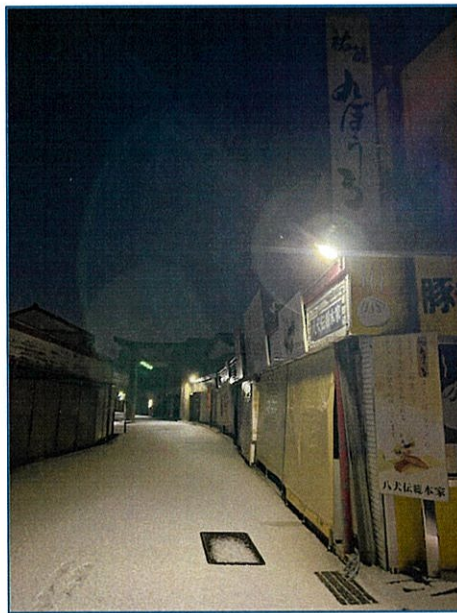
酒蔵文化の継承と新たな人材育成が課題。市民の皆さんがこれまで以上に鹿島市に誇りをもつことができ、「肥前浜宿独自の歴史と生活文化にあふれた活気ある町の実現」を目指している。

7 視察を通しての所感

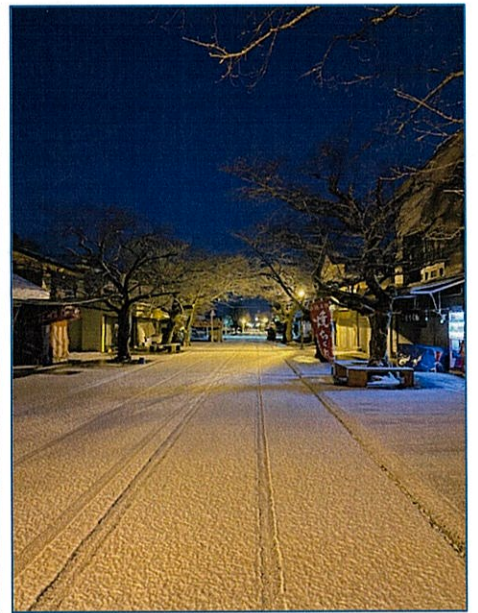
「鹿島酒蔵ツーリズム」は、街全体が酒蔵のまちとして観光地の役割を果たしており、駅(肥前浜宿駅)を降りた目の前からその光景が広がり、観光客に感動を与えている。しかしながら、この鹿島酒蔵ツーリズムが成功した背景に、日本三大稲荷の「祐徳稲荷神社」の存在はとて大きいと感じた。肥前浜宿の宿場町を抜けた先に祐徳稲荷神社の「門前商店街」が立ち並び、1番奥に祐徳稲荷神社がお見えになれる。そのため観光に訪れた方は、駅を降りてから見るところに困ることがない。終始、見どころ満載の状態で、祐徳稲荷神社様に辿り着く道順が出来ている点、全てが繋がっている点が「鹿島酒蔵ツーリズム」が成功した要因と感じた。



【祐徳稲荷神社】



【門前商店街】



【門前商店街前】

◆同行者の所感◆

【加藤】

鹿島市は、古い町並みを残しつつ、酒蔵ツーリズムという新しい事業も積極的に展開している。平成 18 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されて以降は積極的にこの地区の保存活用に取り組んでいる。この地区に最も近い肥前浜駅には令和 3 年に、「HAMA BAR」という日本酒バーをオープンし訪れる人に、日本酒と癒しを提供している。

本市には、全国的に有名な八丁味噌醸造蔵が 2 軒あり観光客もそこそこは訪れているようだが、鹿島市のように(酒蔵が 5 軒密集している)軒数もすくないので、2軒ある酒蔵と協力して、ツアーなど組めれば新たな観光資源にもなるであろう。

【鈴木】

酒蔵ツーリズムは鹿嶋市がもつ重要伝統的建造物群保存地区と 6 件の酒蔵の立地の優位性と言った地域の宝であり財産の再発見やIWC日本酒部門最高賞受賞をきっかけに盛り上がり、地域の良さを情報発信していて本市も見習うべきと感じた。

今後においては継承してもらう新たな人材育成が必要とのことで本市にもあてはまり、今後の鹿島市酒蔵ツーリズムの継承活動に期待したい。

【荻野】

肥前浜宿には多くの酒蔵や町並みがあり、以前は衰退した状況であったが、平成23年に「鍋島」が日本酒部門最高賞を受賞したのを機会に全ての蔵で地域振興に取り組めないかを検討し、「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」が設立され、会員5社の蔵元、賛助会員3社の蔵元で立ち上がった。

ここに「酒サムライコーディネーター平出氏」がアドバイザーとして参画し現在の状況となった。

注視したいのは、地域を想い地域のために鍋島酒造社が誰も住まなくなった家屋を買収し、リノベーションを行い、地域にあった建物として保存活動をしている。

その他、重要伝統的建造物群保存地区指定されるなど多くの条件があったことも確かではあるが、そこに住む住民の地域を守る行為が根本的に集約されている

と思う。

本市もどの方向で何を守るか明確にしていく必要性を感じた。

【杉浦】

鹿島市の酒蔵ツーリズムは、その気候、風土、歴史、物産を活かした取り組みが、きっかけをうまく掴んで事業が展開され、時宜を得て成功を収めていると感じられた。

本市においても、岡崎の持つ、気候、風土、歴史、物産を活かした取り組みへの挑戦が続けられてきた。歴史まちづくり事業において、伝統的建造物群の保存、修景。また、日本遺産認定への挑戦や、大河ドラマを活用した、観光事業等である。そうした取り組みの中で、本市に繰り返し訪れてもらうリピーターを獲得することが重要であり、そのためには、本市の食の魅力の向上、岡崎でしか味わえない体験、旬を感じられるコンテンツの大切さを強く感じる場所である。

鹿島市の取り組みも、長い時間をかけて機運を醸成してきた地域関係者と、広い視点を持ったキーパーソンとの、良い出会いが成功への鍵であるが、本市も、まだ時間はかかるかもしれないが、地道な機運情勢、地域、事業者を巻き込んだ地道で継続的な取り組みが、更なる成功、観光産業都市としての岡崎の発展へとつながっていくことを期待し、支援したい。

【金山】

鹿島市は観光名所とし、祐徳稲荷神社や重要伝統的建造物群保存地区「肥前」が古くからの観光資源としてあるが、ソフト面での観光資源が弱く、立地面においても長崎県への通過地点となっていた。ソフト面で酒蔵が存在していたが、単独での運営を実施していたが、鹿島として蔵開きを同時に行うなど、地区全体として盛り上げるためのイベントを開始、町並みの景観維持も図ることで、町全体のブランディングし、宿場町全体の雰囲気をもビジネス化している。

岡崎市も歴史を感じる建築物、また町並み全体から個別観光資源を結びつけることで、八丁味噌蔵や松應寺、岡崎城など点となっている観光資源の線から面にしていく取り組みが重要であり、提案をしていきたい。

政務調査報告書

報告者：金山直樹

委員会・会派名	自民清風会：加藤義幸 荻野秀範 鈴木静男 杉浦久直 金山直樹 蜂須賀一郎		
視察日時	令和7年2月6日（木）	視察地	広島県竹原市
視察先・概要	広島県 竹原市 人口22,557人 世帯数11,838世帯 面接118.23km ²		
視察内容	官民連携による竹原観光まちづくりについて		
選定理由	DMO（観光地域づくり法人）を立上げ、市内の観光資源を今までの観光協会とは、一線を画した取り組みを行っており、岡崎市も候補DMOを取得しており、取り込めるノウハウ、考え方を調査する為に選定した		

官民連携による竹原観光まちづくりについて

（１）今まで竹原市のまちづくり施策との違い

- ・「稼ぐ力」発揮するため、地域の意見に左右されない為、観光協会とは別組織を設立。

ー背景ー

- ・広島県内において、安芸と備後の間の中途半端な地域であり、近隣の東広島市（人口19万人）、三原市（人口9万人）に囲まれた町であり、差別化を考える必要があった。
- ・古くは塩田を中心として栄えた街であり、安芸の小京都と言われ、当時の町並み保存地区を中心に寺、酒造所などを観光名所としてきた。また、ニッカウィスキー創業者竹鶴政孝の生まれた地域でもある。
- ・日本酒、アヲハタジャム、竹細工が特産品としている。

ー行ったことー

- ・観光資源を棚卸し、「稼ぐ力」を引き出し、地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点で地域づくりをする為、観光協会とは別に（一社）竹原観光まちづくり機構を設立、地域の舵取り役として、令和4年に設立した。
- ・市内観光関連事業者が同じ方向に迎えるように指針とし、竹端観光振興計画も令和5年3月に策定した。

（２）（一社）竹原観光まちづくり機構ー候補DMOーの狙いと活動

- ・平成26年NHK朝の連続テレビ小説「マッサン」、大久野島の放し飼いうさぎの外国人YOUTUBEでの反響により平成26年度は、100万人の観光客を迎え入れた実績もある。
- ・歴史的な建造物、メディア・SNSの観光客が集客した魅力を再整理し、観光協会参加企業の声に縛られず、自由に魅力発進、稼ぐ力の施策に取り組む体制を構築した。
- ・今までの観光協会では、関係者が納得理解する尖ったところがないありきたりな施策になってしまうため、尖った取り組みをするため、組織化した。

- ・代表理事を市長とし、事務局長は産業振興課長が兼務し、出向者、地域おこし協力隊、パートの体制で実施
- ・最高の顧客満足を目指し、ミッションを明確にし、ありたい組織像を設定した
The Salt of Life (SOL) = 最高の顧客満足をビジョンとする
- ・ビジョンを元に精神的な豊かさ、経済的な豊かさを実現する（運営者も観光客も）
- ・4つの重点施策を決め、
①観光まちづくり…歴史資源と文化 ②観光プロモーション…マーケティング
③ふるさと納税…流通、商品戦略 ④移住定住…交流人口、受入整備
- ・4施策を中心に、目標を決め取り組みを行うことで、数値を稼ぐことを目的に活動ができ成果に繋がっている
- ・平均点の向上ではなく、尖った、特徴をどこまでも伸ばす

（３）今後の取り組み

- ・4事業を中期財務計画を作成し、目標達成に向け、組織を能動的に変化させる計画
事業戦略連携室の設置、観光グループ、物販グループ、誘致グループと大部屋的な組織を機能組織にステップアップさせ、目標達成をさらなる成果の積み上げを目指す

【所感】

岡崎市においても、観光協会が候補DMOとなり、認定に向けた活動を進めていることは理解しています。観光は市の優位性を高める重要な要素であり、観光客やインバウンドの獲得を促進するだけでなく、市の魅力を広く発信し、多くの人に岡崎を知ってもらう機会を創出する役割を担っています。

また、現在富山市で取り組まれている「お試し就職支援事業」のように、市内の職人育成を目的とする施策にも注目しています。たとえ職人にならずとも、岡崎での関わりを通じて得た経験をもとに、市の魅力を発信してもらえる人材の育成につなげるのが重要です。このような観光施策を通じて、岡崎市の観光発信人を増やし、市への関心を高め、さらなる交流人口・関係人口の増加を期待しています。

さらに、岡崎市の観光資源を活かすため、年齢層ごとにセグメントを明確化し、それぞれに適した発信施策を強化することが必要です。例えば、若年層には「東海オンエア」を活用したプロモーション、歴史愛好者には戦国武将や城をテーマにした観光コンテンツの充実、伝統文化を好む層には工芸体験の機会を増やすなど、ターゲットに応じた施策を展開すべきです。加えて、これらの観光資源を「有料体験」として展開し、観光の収益化につなげることも重要な視点となります。

今後、市政においてもこうした方針を反映し、観光施策の充実と持続可能な発展に向けて取り組んでまいります。

【同行者所感】

(加藤)

竹原市は、官民連携した観光まちづくり推進のため、竹原観光まちづくり機構（地域DMO）の活動を令和5年4月1日より本格的に開始した。竹原市の振興のために、町並み保存地区の保存と活用推進、忠海エリアの歴史的遺構と自然の保護、歴史的資源と文化の継承のための「観光まちづくり」、「観光プロモーション」流通戦略、商品企画を進める「ふるさと納税」及び「移住定住対策」の4つを全体事業計画としている。

視察をとおして感じたことは、このDMOは、観光協会、行政の企画部門がやるべき事業にも参入している。特に、観光協会との住み分けがしっかりできていないような気がした。近い将来観光協会と合体した組織ができるのではとも感じた。

本市にも観光協会はあるが、あくまで観光を通した活性化に寄与することを目的としているが、竹原DMOのように色々な角度から地域振興のための事業を展開できる組織があってもよいと思った。

(荻野)

竹原市は官民連携による竹原観光まちづくりを進める中で、ありがたい組織として「個だけではなく、組織として取り組むために戦略的に事業を展開する」「新しい価値観を取り入れる柔軟さを私たちが持つ」など組織像を定め展開している。

その組織は「一般社団法人竹原観光まちづくり機構」で市長が代表理事を務め事務局は9名で構成されており精力的に展開がされている。

その中でも「観光まちづくり」「ふるさと納税」について記述する

観光まちづくりでは、町並み保存地区の保存と活用を具体的な事業として定め活用計画に基づきアクションプランを作成し、優先度の高い物件の活用を実施するとともに優先度の低い物件の長期活用計画の具体化を進めている

ふるさと納税では、「流通の戦略」「商品の企画」「流通の施策」を進め、2029年度にはすべての工程を竹原DMOが主体となって進められるように段階的に業務遺構と体制づくりを行っている。

本市のふるさと納税については納税額よりも所得控除や経費の方が上回っており、今後は市で行えるように事業移管を検討すると共に商品の開発を重点的に行う必要があると考える。

岡崎市観光協会の経営能力の向上と組織体制の強化を重点的に進める必要を感じた。

(杉浦)

竹原市の観光まちづくり事業は、なかなか難しい状況なのではないかと感じる視察であった。まず、前日に宿泊した呉市から電車で瀬戸内海をゆっくりと進み竹原駅に着いたが、駅前もとても寂しく感じられた。歴史的建造物が残る町並み保存地区やうさぎの大久野島など、主に自動車での観光客誘致になるのかと思うが、空港、高速道路などからの距離や、他の瀬戸内海沿岸の各都市との比較での特徴づけなど不利な面も多く、成功への道のりはまだ途上に思われた。

さて本市であるが、交通利便性や歴史資産、人口密集地からの距離など、成功に至る要素はとも多いように感じられるが、まだまだその資産を十分に活かしていきれていないと感じる。その要因としては、観光に頼らずやって来れているという他の産業の強さもあるが、市内に観光資源が多く、それぞれが地域で分散されていること、また市民自身もその価値に気づいていないことも感じられる。観光が産業として成熟していくには、まだまだ時間がかかるかと思うところであるが、竹原市の取り組みのように、官民連携し、市民、事業者を巻き込む形で取り組んでいくことは重要であり、継続的に支援していきたい。